よむ、上卿以下これを追、殿上人ども御殿の方に立て桃の弓にている、仙花門より入て、東庭をへて瀧口の戸にいづ、こよひ所々にともし火をおほくともす、東庭、あさがれい、だいばん所のまへのみぎりに燈臺をひまなく立てともすなり、

〔年中行事歌合〕三十五番　右　追儺　　内大臣

いまはたゞ一夜になりてあしのやのいるがごとくにとしぞくれぬる〇中略

右追儺とは、年中の疫ををひはらひ侍るこゝろにや、ひかる源氏に、なやらふなど申侍るも、儺を追にて侍るなり、やらふとは追と云ことばなり、夜の事なれば、殿上の侍臣、桃のゆみ、あしの矢をもつて、御殿のかたにたちておにをいるなり、四目あるおそろしきおもてをきて、手にたてほこをもつ、また倀子（こわらはべ）とて二十人、こんの布衣きたるものをそつして、内裏の四門をめぐるなり、慶雲二年〇二年、三年誤、よりはじまるとぞ、〇四目以下、據一本補、

〔公事根源十二月〕追儺　　卅日

けふはなやらふ夜なれば、大舎人寮鬼をつとめ、陰陽寮祭文をもて南殿の邊につきてよむ、上卿以下是をおふ、殿上人ども御殿の方に立て、桃の弓あしの矢にている、仙花門より入て、東庭をへて瀧口の戸にいづ、こよひ御前に灯をおほくともす、東庭、朝餉、臺盤所のまへのみぎりに、灯臺を隙なくたてゝともす也、追儺といふは、年中の疫氣をはらふ心也、鬼といふは、方相氏の事也、四目ありて、おそろしげなる面をきて、手にたてほこをもつ、又倀子とて廿人紺の布衣きたる物を率して、内裏の四門をまはるなり、慶雲二年十二月にはじまる、此年天下に百姓おほく疫癘になやまされ侍し故なり、

〔延喜式四十三春宮〕凡十二月晦日戌時追儺、坊官率二品官舎人等一候二南門外一、兵衛開門如常、内裏儺聲始發、大夫以下各執二桃弓葦矢一入立二庭中一、倶作二儺聲一、分出二諸門一、